

広報

# ちくしの

人権問題特集号

発行／筑紫野市

編集／同和問題啓発資料編集員会

12月4日から10日は「人権週間」です。

- 目次
- 「ふれジョブ」～子どもの可能性を引き出そう～ ..... 2
  - 駐車マナーはあたたかな思いやりの心を ..... 3
  - 21世紀を生きる子どもたちに豊かな人権感覚を ..... 4
  - 大切にしたい子どもの「自己尊重の感情」 ..... 5
  - 共につくる 誰もが住みやすいまち ちくしの ..... 6
  - 『認知症になつても～心豊かに過ごしていきたい～』 ..... 7

2013年

12/1



# 「ふれジョブ」で子どもの可能性を引き出そう

## ふれジョブって何

プレジョブは、障がいのある子もそうでない子も一緒に生きていくことができる地域社会をつくることを目的にした活動です。

## どんなことをするの



## ふれジョブがめざすものは

「あの子は、障がいがあるから仕事なんてできない」と始めから決めつけたり、させていなかつたりといったことはないでしょか。

障がいがあることで出来ないこともあります。できることもありますたくさんあるのです。ふれジョブは、それぞれの能力に合わせてその子が持つ可能性を最大限に引き出す取り組みなのです。

## ふれジョブでリサイクル工場の職場体験をしたAさんと活動を支援した人たちの感想から

### Aさん

チラシや雑誌などの種類別に分けて紐で縛る仕事でした。初めは分け方がわからなくて教えてもらいましたが、2回3回すると少し早くできるようになりました。

いつも大きな声でいいさつしてくれるのと、とても気持ちよかったです。仕事を覚えるのが早くて紙の整理も上手になりました。

学校の先生

自分のやることに責任が出てきたようです。

ふれジョブは、本人を変える力を持つていると感じます。

### 保護者

本人もとても楽しみにしていました。また、サポーターや事業所の人たちから褒めてもらえることは、親にとってもうれしいことです。

### サポーター

おもしろいチラシがあると、チラシが気になつて仕事がおろそかになることもあります。

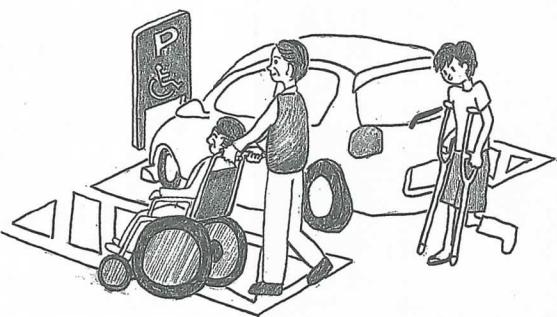
事業所の人たちから褒めてもらえることは、親にとってもう

# 駐車マナーはあたたかな思いやりの心を

せっかく用意されているのに…

買い物に行くと、車いすせん用ちゅう車場が空いていなかつた。お父さんが車いすせん用のちゅう車場を見ていたので、「どうしたの。」と聞くと、お父さんが、「車いすせん用のちゅう車場を見てござらん。」と言つたので、ぼくが見ているとそこに車をとめていた家族が走つている姿が見えた。お父さんが「この人たちは、車いすの人たちのことを考えない人だよ。」と言つた。ぼくは何だか悲しい気持ちになつた。

世の中には、元気な人もいれば、体が不自由な人もいる。みんながよりよい生活をするためには、車いすの人や体の不自由な人たちのことを考えなければいけないと思う。ぼくは、自分のことだけではなく、いろんな人のことを考える思いやりや、やさしさをいつも持てる人になりたい。



車いすを使用している人にとって、自動車はとても大切な移動手段です。また、障がい者用駐車場は、車いすを使用している人や杖を使用している人など歩行が困難な人のための駐車スペースです。この駐車場は、車いすを利用する人が車を乗り降りする時、ドアをいっぱいまで開けられるように通常の幅より広くなっています。公共施設やショッピングセンターなど多くの人が利用する施設では出入口近くに設けられています。

しかし、作文の中にもあるように、車いすを使用していない人が車いすマークの意味を理解していなかつたり、あるいは知つていても「ちょっととの時間だから」「入り口に近いから」「空いていたから」など、軽い気持ちで駐車してしまつたりして、本当に必要な人が駐車できないというケースが多くみられます。

## 「このマーク何?」

「どうしてここに停めてはいけないの?」

家族や友だちからの質問に答えられますか?

駐車マナーは、一人ひとりのあたたかい思いやりの心で支えられています。私たち一人ひとりのマナーと思いやりで、誰もが安心して暮らせるまちをつくっていきたいものです。

この作文は、昨年（2012年度）の人権作文集「くさび」に掲載された、当時、山口小学校の四年生 谷口雄介さんの作品の一部を抜粋したものです。



# 21世紀を生きる子どもたちに豊かな人権感覚を

## 気持ちを伝える

7月17日（木）から、ラオスの子どもたちがきました。最初は、どう接したらよいか分からなく、あまり話をすることができませんでした。思い切って話をしていくうちに、だんだん少しずつ接し方が分かつてきました。そして、いつしょに遊んだり、会話をしたりすることによって、少し仲よくなれた気がしました。わたしが言っていることが分かつているのかは、よく分からぬけど、ジェスチャーをしたりするとOKと言つてくれるで、とてもうれしかつたです。ジェスチャーをすることによつて、気持ちを伝えることができるということがよく分かりました。

この受け入れ事業は、1989（平成元）年に開催された「アジア太平洋博覧会＝よかトピア」の記念事業としてスタートした市民レベルの国際交流プログラムの一つです。目的は、「ホームステイや学校登校、日本を含む多くの国籍の子ども大使と寝食をともにしながら交流を深めるキャンプなど、さまざまな異文化体験を通して、違いを乗り越えてお互いを思いやる気持ちを育み、国際理解や相互理解を推し進める」ことです。

本市では、この目的に賛同し、また国際交流事業の一環として、毎年アジア太平洋の国や地域から子ども大使を受け入れています。（写真）

そして、市内の小学校が順番に受け入れて、小学生が、身近に国際交流を体験できるようにしています。

このような体験を通して、お互いの違いを認め、尊重し、理解するという豊かな人権感覚を身につけることは、21世紀の国際社会を生きる子どもたちにとっても大切な課題だと思います。



筑紫野市と子ども大使との対面式の様子  
(会場:天拝坂公民館)

これは、本年度「アジア太平洋子ども会議・イン福岡」で、ラオス人民民主共和国の子ども大使の受け入れ校である天拝小学校で、7月17日から19日までの3日間、ラオスの子どもたちと交流体験をした後の6年生金澤舞音さんの作文です。

金澤舞音さんは、①異なった国の人との出会いやかかわり方への戸惑い ②思い切つてコミュニケーションをすることの大切さ ③ことばの違いを乗り越える交流の仕方 ④お互いを理解する表現方法など、身近に体験できた国際交流活動から多くを学んだのではないか。

# 大切にしたい子どもの「自己尊重の感情」

子どもが幼いころは、何か一つできるたびにそのことを喜びとして感じてきたことでしょう。ところが、小学校や中学校と成長していくにつれて、「出来ること」より「出来ないこと」ばかり気になり、指摘することが多くなりがちです。もちろん「出来ないこと」が「出来るようになる」ように努力することは大切なことです。が、子ども一人ひとりの成長には個人差があります。だからこそ、些細な成長を見逃さないよう、良いところや「できたこと」「できるようになったこと」をしっかりと褒めることが大切です。

人は誰でも「大切にされたい」「人の役に立ちたい」「認められたい」「必要とされたい」などの気持ちをもっています。子どもたちも同じです。このような気持ちを周りのおとなや友だち同士の関わりの中で大切にされていくことで、自己尊重の感情が育まれてきます。

自分を大切に思う気持ちが育てば、他人を大切に思う気持ちも育つていきます。また、何か失敗したり、挫折を味わったりしても「また、次がんばろう」という気持ちをもつことができます。

## 家庭で育てる自己尊重の感情

子どもは、親に、そして周りのおとなたちに愛されたいと願っています。だから、子どもたちはちょっとしたおとの言葉や態度ですごく傷つけます。

「あなたが大切だよ。」「大好きだよ。」のメッセージを日々の暮らしの中で子どもたちに伝えていくことが子どもの自己尊重の感情を高めていくことにつながると思います。

## 『チエック！子育て』

- 友だち兄弟と比較して褒めていませんか？
- 親の気分で褒めたり、叱ったりしていませんか？
- 失敗ばかり責めていませんか？
- 「それぐらいできて当たり前」と言ってサラッと聞き流していませんか？
- 子どもは、このような子育てをすると自己尊重の感情が育たないと言われています。

## 人権・同和教育の取り組みで大切にしてきたこと

筑紫野市では、平成24年度に「人権感覚育成プログラム」を作成し、筑紫野市内の小中学校で取り組んでいます。このプログラムの共通目標は、小・中学校の子どもたちの自己尊重の感情を高めていくことです。

その取り組みの一つに、市内のほとんどの小学校低学年で行っている「いいとこみつけ」の学習があります。この学習は、友だちのいいところを見つけることをとおして、自分の良さを見つけてもらつた「心地よさ」に気づいたり、「自分も友だちの良さを意欲的に見つけよう」としたりすることをねらっています。

子どもたちは、このような学習を重ねていくことで人間関係作りを学ぶだけでなく、豊かな人権感覚が育つていくのです。

## 共につくる 誰もが住みやすいまち ちくしの

外国人が生活するうえでの大きな問題は、地域でのつながりを築けないで孤立してしまうことです。それは、言葉が通じないことや文化の違いなどが周りに理解されないこともその原因の一つです。そこで、ボランティアスタッフを中心に地域の人と交流しながら互いに理解を深めつつ、外国人が日常生活を営むうえで必要な日本語を身に付けることを目的として、今年の4月、日本語教室「ワイワイ日本語ちくしの」が開設されました。

ここでは、外国人の学習者が、日本語の理解度や学びたい内容に応じてグループを作り、スタッフと共に学習が進められています。スタッフには、日本語教師の資格を持った人や他市で日本語教室に関わっている人がいますが、そうでない人も多くいます。この教室に初めて関わるスタッフに聞いてみました。

○身近な国際交流と思って応募したけど、外国語を使うわけじゃないんね。一緒に筑紫野市や日本のことを学び直しよる感じが楽しいね。

○相手に分かるような話し方や優しい言い回しを考えよ。日本語の方を工夫することも大事やね。

○勉強の成果もあるやろうけど、始めた時より会話が長く続くようになつたのは頗なじみになつたから。お互い『慣れ』が大事ばい。

言葉を習い覚えることも大事なことですが、相手を尊重する気持ちは、言葉の壁を越えて相手に伝わります。この教室では、「教える」「教わる」だけではないつながりが生まれているようです。

回覧板が読めない、子どもが学校から持ち帰つてくるプリントの内容が分からず、近所の集まりに参加できていない……。そんな人があなたの隣にいないでしょうか。スタッフの声には、地域や学校における私たちにできる行動のヒントが隠されています。特別な資格や豊かな経験がなくても「ゆっくり話す」「分かり易い日本語で話す」そして、何よりもお互いが分かり合いたいと思う気持ちが、深いつながりを生みだしていきます。

国籍に関係なく、誰もが住みやすいまち、住んでいて良かつたと思う筑紫野市を地域社会の一員として共に築いていく……。この教室の取り組みが、筑紫野市のまちづくりのための大きな推進力となることが期待されています。



### あなたも参加しませんか？

筑紫野市日本語教室「ワイワイ日本語ちくしの」

日時：毎週火曜日 10:00～12:00

場所：生涯学習センター

問合せ先：生涯学習課

☎092-918-3535

## 『認知症になつても、心豊かに過ごしていきたい』

「アルツハイマー型認知症ですね。」医師にそう告げられて、私はホッとして「認知症だつたんですね。」と答えました。

診断を受ける前、68歳の夫の行動や態度の変化に数年間悩まされていた私は胸のつかえが取れたようでした。

この夫妻はともに65歳以上で2人暮らしです。認知症になつた夫、介護する妻がともに高齢者という、いわゆる「老老介護」という日常生活が始まりました。

私は不安を感じたり同じことを聞いたりする夫の症状が、病気の影響だとわかつてからは、できるだけ病気が進行しないように散歩に誘つたり繰り返し言い聞かせたりして夫に接し、また要介護の認定を受けてデイサービスも活用しながら在宅で介護を続けていました。

一方、病気になつた夫は、「食事をしたことを忘れる」「暴言を吐くなどの思いがけない感情」「配偶者、子、孫のことがわからなくなる」など一般的な認知症の症状を多少は知つていただけに、自分が自分でなくなるのではないか、という不安感で気分も落ち込み、それまで毎日のように続けていた愛犬の散歩にも行かなくなる日が出てきました。

また、認知症の進行を遅らせる薬が合わなかつたこともあり、症状は徐々に進行していき、元気だった頃とは比べものにならないほど夫の様子は変わっていきました。このころから私も、自分ひとり

での介護に疲れやストレスを感じることが増えてきて、体調を崩すようになりました。そして、このままではいけない、何か良い方法はないだろうかと悩んでいた私は、主治医や地域の人達などに相談をしました。そんな中、認知症に対応して集団生活を送れる施設があることを知り、その後、夫はその施設に入所することになりました。

施設での生活により、夫は見違えるように落ち着きを取り戻し穏やかな日々を送れるようになりました。特に、地域の小学生たちが施設へ訪問してくれたときには、児童と一緒に歌つたり笑つたりしてとても有意義な時間を過ごしています。

私自身の体調も徐々に安定ってきて精神的にもゆとりが出てきました。毎日とはいきませんが、グループホームに夫を訪ねいろいろな話をして夫との楽しい時間を過ごすことができるようになりました。



認知症になると何もかも分からなくなるわけではありません。確かに記憶や理解力は低下しますが、楽しいことやうれしいことは理解できます。むしろ、いろいろな感情と心身のバランスに悩んでいます。

人は皆、年を重ねていくうちに心身の機能は低下していきます。認知症になつても住み慣れた地域の中で心豊かに過ごしていけるような地域社会でありたいものです。

# 12月4日～10日 人権週間とは

1948（昭和23）年12月10日の国連総会で「世界人権宣言」が採択されたのを記念して、この日を“世界人権デー”と定めました。

日本では、翌年の昭和24年から毎年12月4日から10日までの一週間を「人権週間」として、広く国民に人権意識の高揚を呼びかけています。

## 筑紫野市の主な取り組み

### ★街頭啓発

とき 12月3日(火)18時～19時  
ところ JR二日市駅、西鉄二日市駅、  
朝倉街道駅

### ★市内児童生徒の人権ポスターや標語の掲示

とき 11月27日(水)～12月11日(水)  
ところ 各コミュニティセンター、カミーリヤなど

## 福岡県の主な取り組み

### ★人権週間講演会

とき 12月7日(土)11時00分～16時30分  
ところ クローバープラザ「大ホール」  
内容 映画「アイ・コンタクト」  
講演「命におもいをよせて  
～ペコロスの母に会いに行く～」  
講師 岡野雄一さん（漫画家）

## 編集後記

「愛」の反対は、「憎しみ」ではなく「無関心」だ

これは、マザー・テレサの言葉です。

人は、「自分には関係がない」と思っていることには関心が向かないものです。部落問題もほかの人権問題も「一部の人たちの問題」と捉えている限りは、自分は差別した覚えもないし、差別されたこともないので「自分には関係がない」と思ってしまいがちです。

かつての私もそう思っていたひとりでした。

「自分には関係ない…」そう思っていた私は、過去に大切な友だちを傷つけてしまった経験があります。「あんたは部落だから…」と

そして、私も自分自身のことを「差別者」として自分の心に重い鎧を背負って生きてきました。

でも、部落の人は言った。「あんたは差別者だったかもしれません。でも、その自分の過ちに気づくことが大切だよ。差別をなくすために共に歩いていこう。」と

自分の家族を、自分の生まれ育ったムラの人たちを差別した私に対して「憎しみ」でも「無関心」でもなく、まさに「愛」をもって私を教えてくれた。

いま、私は思う・・・差別することから解き放たれる自分自身を愛しいと。

だから、私は無関心ではいられない。